芸大(哲学入門ーーアート＆プロセス　2017年5月11日)

哲学入門ーーアート＆プロセス

2017/5/11

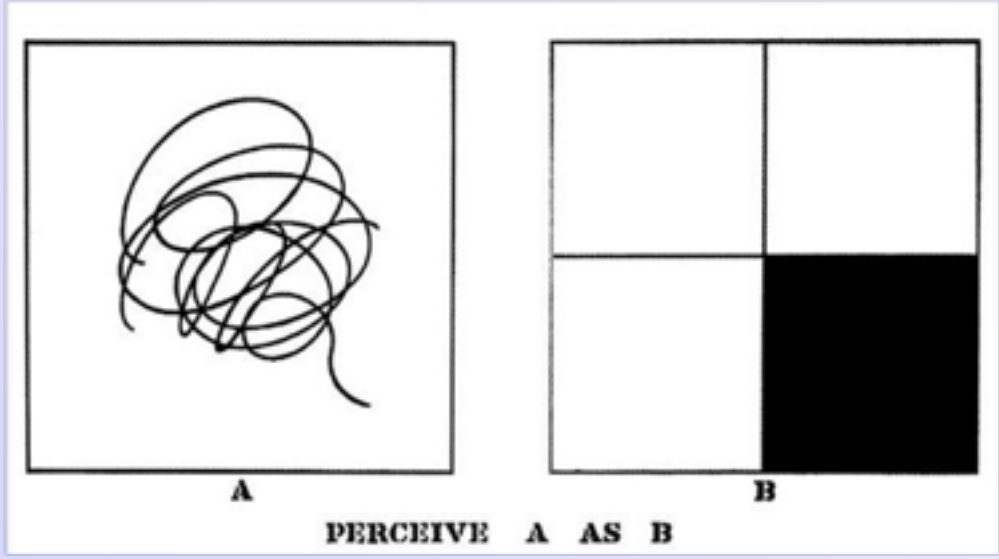
東洋大学文学部哲学科
河本英夫

世界の隙間 1

- 1)写真での顔の写りは何割程度のデキか。反射的に、7割、8割、10割ということは見てすぐにわかる。ところで10割の顔はいつ見たのか。鏡は2次元の切り取りであり、10割の顔ではない。おそらく10割の顔は、誰しも見たことがない。だがそれが何であるかはよく知っている。
- 2)ウサギとカメが競争するとき、やがてカメは草むらで眠っているウサギを追い抜く。・・・・カメは何故ウサギを起こさないのか。ウサギを横目で見ながら追い抜くときのカメの顔はどのようなものか。
- 3)食物連鎖では、生まれてきたイワシは98%エサとして食べられてしまう。しかしイワシは結果として食べられてしまう場合であっても、食べられるために生まれてくるのではない。少なくとも、イワシは固有に生きている。固有に生きているという事態と、いずれにしろイワシは食べられてしまうという事態は、両方ともに事実である。この二つの事実を内的に関連付けて捉えるにはどのようにすればよいのか。

世界の隙間２(AをBとして知覚せよ)

(Impossible exercise)



世界の隙間3

- 知覚は直接捉えることであり、想像したり、推論したり、想定することではない。だが直接捉えることはできない。
- 1)課題を別様に転換する。
- AとBの中間の図柄を複数個描きなさい。
- AとBが前面、横面であるような立体を想定したとき、上から見た図柄を描きなさい。

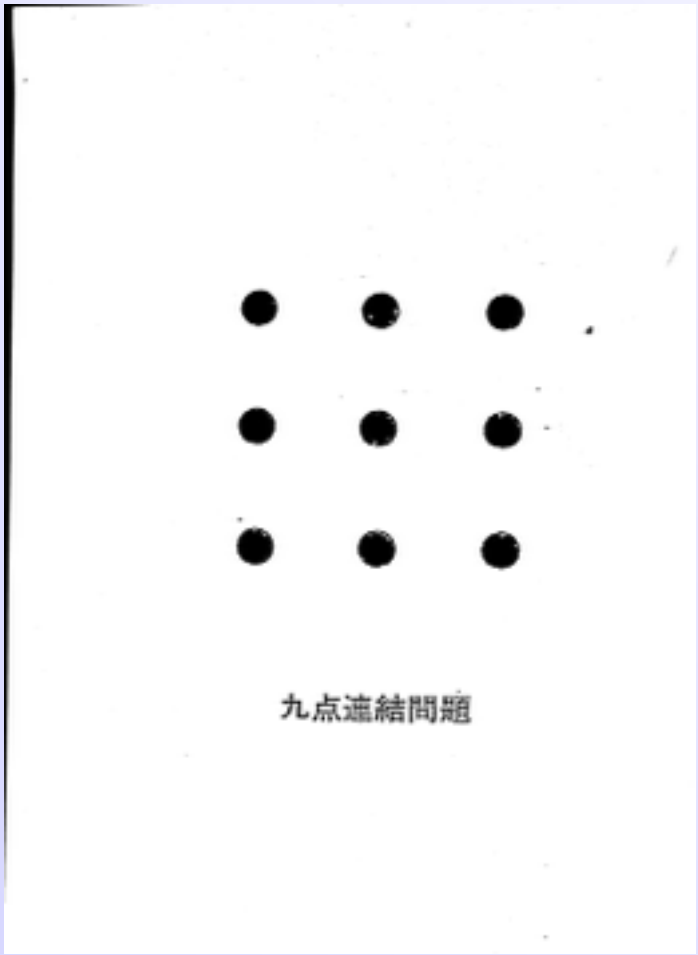
科学と芸術

- 解答をあたえること——科学　：Ａが横、Ｂが前方の見え姿の立体を構想せよ。その立体の上から見た図を示しなさい。この回答に仕方は、一つに決まるのか。
- 解答するとはどのようなことかを考えること——哲学　：回答が出る問題と回答が出ない問題は、いったいどこで決めているのか。ネアンデルタール人は、何を可能だと考えているのか。
- 解答とは外的に問いの延長上で何かを作り出してしまうこと——芸術　：作り出すことは、問いを別様にすることであり、新たに別建ての問いに直面することである。
- 解答の奥深さに驚嘆すること——宗教　：繊細な自己陶酔はありうる。
- 解答とは別に、岩に上ること——健康

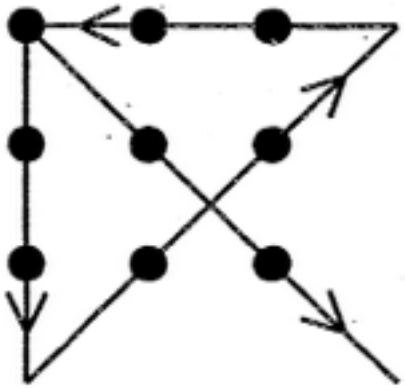
世界の隙間4

- リンゴの共通の本性を知るためにはどのようにするか。味も臭いも形も異なる世界中のリンゴを集めてきて、ことごとく調べて、共通の性質を取り出す。これは帰納法である。
- このとき、調べる以前に、世界中のリンゴをことごくと集めてこなければならない。調べる以前にとてもよく知っている領域がある。これが直接的体験世界で、「現象学」の探求領域である。
- 集めてきたリンゴが、調べてみたら、見てくれはリンゴだが、実際にはリンゴではなかった、ということはしばしば起きる。相同関係は、知覚の特性であり、ジャガイモとサツマイモは類似しているが、茎と根の違いがある。またリンゴではないと思っていたが、調べてみたらリンゴだったということも起きる。新種の発見である。

初級エクササイズ(4直線一筆書き)



初級エクササイズ2



九点連結問題の解答

言葉の活用１

- 言葉を＜あえて使う＞。春先になり心地よい風が吹き、土の香りがして、若葉に囲まれているとき、あえて「春は嫌いだ」と言ってみる。美女を見て「すげえ美人だな」と思ったら、「美人は糞くらえだ」とあえて言ってみる。なにか落ち着きのなさ、当惑に似た収まりの悪さを感じる。その気持ちを抱えたまま、線を引いてみる、色を付けてみる。
- 愛は・・・・・この・・・・・に適合的な語を付けなさい。
- 例　愛は陽射しを受けて微笑む小石
- 内面という語を張り付ける、光の内面、空気の内面、音の内面、土の内面、ダイヤモンドの内面等々、

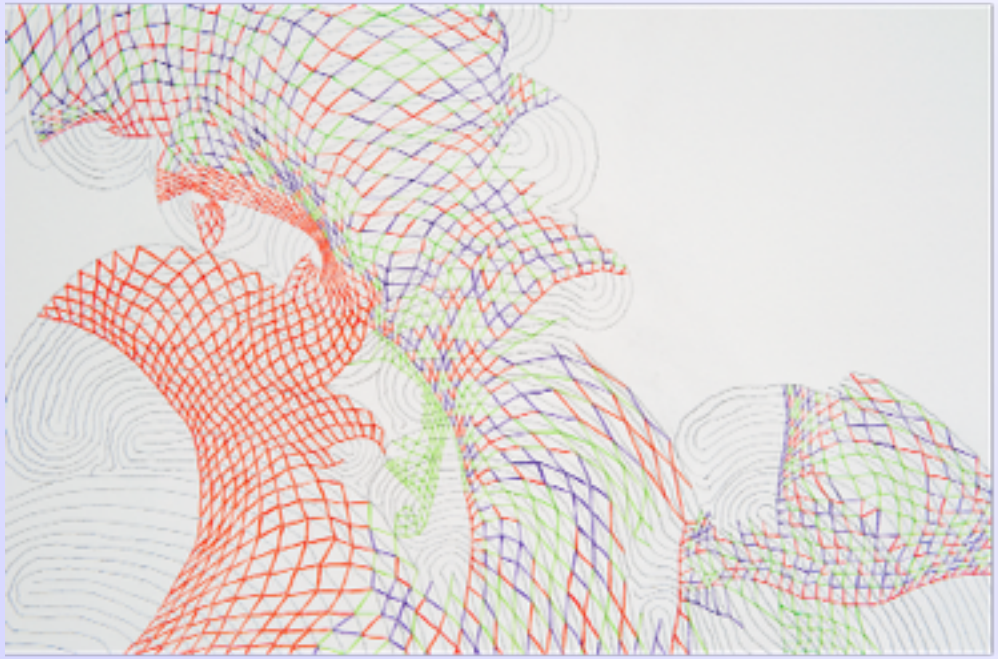
言語の活用２

- 自分自身にとってよく分からず、何かが語られている感触はあるが、どうすることなのか理解できず、また配置をあたえることもできない。これは経験を開き、ペンディングにするモードであり、目的を解除して、経験の組織化そのものへと開いてしまう在り方である。
- 死なないことに決めた
- 不可能故に我信ず
- 天命反転
- これらを意味として理解するのではなく、どういう経験をすればこうした事態を経験したことになるのか？というように経験を開いてしまうことが肝要である。このとき少々の感覚変容であれば、すべて測定誤差に入るような経験へと向かうことになる。つまり本人自身は、奇妙、変人、変態であるが、精神疾患にはなりようがない状態へと向けて、経験の組織化を行う。
- 経験の限界の一歩先を指示するような表現となり、それじたいが一種の芸術である。

強度性

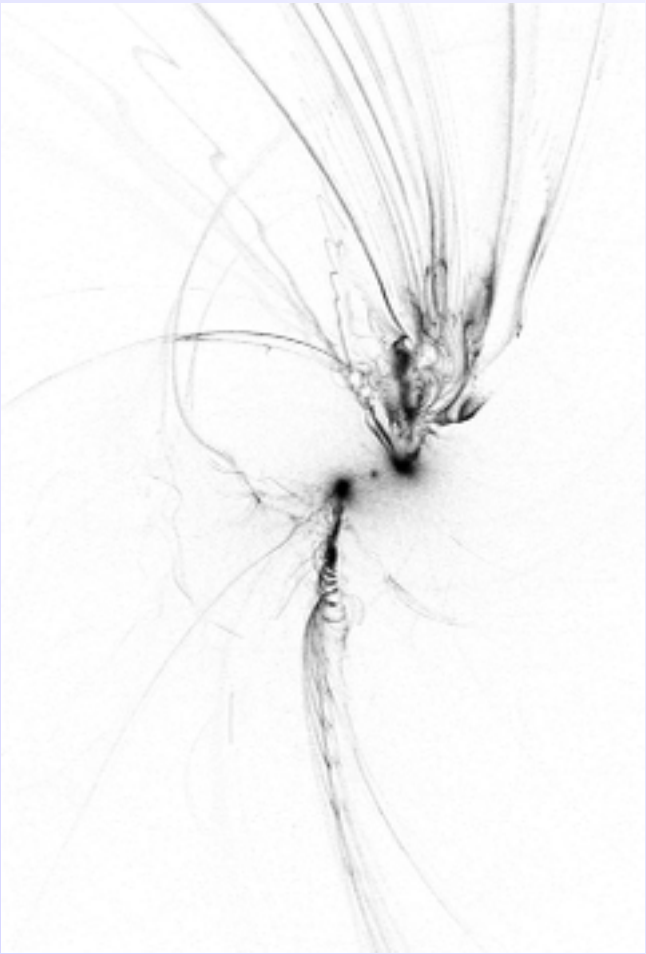
- カレーライスの味はどのような形か。一般的な三角形、直角三角形、菱形、五角形、六角形、円のどれに近いか。
- 味と図形は、それぞれ異なる質であり、質とは他のものとの関係で、部分全体関係に入らないもの、あるいは共通の座標軸になかに入らないものを意味する。味と図形の間には、共通の座標軸はない。
- にもかかわらず近さ、遠さの度合いの違いはあり、感覚的な経験は、それぞれ異なる感覚質の間を、度合いの違いで感じ分けている。この度合いを「強度」という。強度の強さ、弱さ、事象の近さ、遠さは、直接感じ分けられており、経験の主要な部分はほとんどが強度性の経験である。これに対して知覚は、意味を知ることであり、知って分かって世界を安定させることである。
- 変化率も経験としては強度である。エレベータが動き始めたとき、体重が出現する。寝返りをうつときも体重が出現する。サッカーのゴールキーパは、シュートが味方のデフェンダーに当たって玉筋が変わっただけで、すでに動いてしまっている。変化率には身体行為で反応してしまう。
- 強度は感覚の可能性を開き、当人にとっての現実性を拡張する。（レジリアンス1）レジリアンスとは、疾病への抵抗力であり、疾病からの回復力であり、「脆弱性」への対抗概念である。

連動(カップリング)



村山悟郎『Drawing / Coupling』(2010)

運動１(カオス波形)



運動2(カオス波形)

形の制約

- 色を塗るさいに、形に意味を見ないことが必要となる。蝶に似ているとか、クジャクに似ているとか、似ている物を探して、すでに知っていることを見出していくことはしない——みずから自身を繰り返さない（Mデュシャン）が必要となる。たとえば火星人をタコ足の人物として描くことは、地球的規模のイメージの貧困である。
- むしろ形の間の変換のエクササイズをやった方がよい。ヒトデ（5本足）とイカは、形の上では相当隔たっている。ヒトデに、圧縮と伸長のオペレーションを1度だけかければ、イカに変換できる。どのようにすればよいか。
- 形の間には、圧縮と伸長の変換で、相当多くの可能性に開かれている。

システム１

- 生命システムで生じていることは、飛行機で生じていることに似ている。パイロットは外界に出ることは許されず、計器に示された数値をコントロールするという機能しか行わない。パイロットの仕事は、計器のさまざまな数値を読み、あらかじめ決められた航路ないし、計器から導かれる航路にしたがって、進路を確定していくことである。パイロットが機外に降り立つと、夜間の見事な飛行や着陸を友人からほめられて当惑する。・・・というのもパイロットの仕事は、観察者が記述し表そうとしている行為とはまるで異なっているからである。
- 外的視点と内的視点の変換不可能性（理解可能性が破綻する、解釈学の限界）
- クジャクのメスは、オスの羽の目の数が140以上のオスに求愛する。しかし目の数を数えているはずがない。カメレオンは、自分の身体色を環境に似せて変えるが、環境の色と自分の体色を比較照合して変えているはずがない。
- 神経系にとっての健康は、観察者が見たときと、システムそのものにとっての事態が別れてくる。ニューロンの総量は、基本的には年齢とともに減少し続けており、機能的特定化の方向に向かう。特定機能化することは、神経系の対応可能性を狭くし続けることである。

システム2

- 家を建てる場合を想定する。13人づつの職人からなる二組の集団をつくる。一方の集団には、見取り図、設計図、レイアウトその他の必要なものはすべて揃え、棟梁を指定して、棟梁の指示通りに作業を進める。・・・もう一方の13人の集団には見取り図も設計図もレイアウトもなく、ただ職人相互が相互の配置だけでどう行動するかが決まっている。職人たちは当初偶然特定の配置につく。配置についた途端、動きが開始される。こうしたやり方でも家はできる。
- アリやハチが、巣を作るさいに、あらかじめ談合して設計図を見て作っているとは考えられない。
- 目的が決まった時、それを実現するためには、目的に向かうような目的合理的行為で形成されているとは限らない。まったく別の回路で形成されている可能性があり、プロセスの連動から作られている可能性が高い。
- 溶液中で結晶が形成されるとき、溶液内の生成プロセスは継続するが、一つ一つの生成プロセスは、結晶を作ろうとして、作っているのではない。生命の生成プロセスは、目的(結果)に向かうように進行しているとは考えにくいが、にもかかわらず結果は合致する。

何を問えば問いになるのか——問いの千一歩手前

問いと現実

- 問いは現実性を出現させるとともに、現実性を縮減する。判断は、さらにそれを確定する。判断を他者に向けて行うことは、その確定をみずからに所有させる。
- 現実性を縮減しない問いはどのようなものか。この問いじたいは、何を縮減しているのか。
- 問いから創発に進むことは可能なのか。

触覚のランディングサイト

- 感じることが、ここにあることであり、ここを占め、ここを占めるとともに動くことである。(ランディングサイトの二重作動)
- イメージのランディングサイト、知覚のランディングサイト以前に、触覚のランディングサイトという飛び切りの働きがある。ここを感じ取るともに、同時に身体を形成する、ここを感じ取るとともに世界内に身体の位置を感じる、ここを感じ取るとともに世界内での運動の可能性を獲得する
- 一つの行為を行うことが、同時に異なる事態を出現させる仕組みが、二重作動であり、世界に多様性を形成していく仕組みである。

エアートンネル

大崎晴地『air tunnel』(2013)

バリアーハウス

人工的里山

立つこと

- じっと佇むだけで、おのずと遊べる。斜面に立つことは、非周期的、非規則的な力感マトリクスの運動を生む。この身体の内発性が、おのずと運動の可能性を起動させる。

- この場所で、何もしないことを決意せよ。
- この場所で、眼を閉じてただ立つことを実行せよ。
- この場所で位置をイメージせよ。(イメージのランディングサイト)
- この場所で、何かを見よ。(知覚のランディングサイト)
- この場所で、休養するにはどうしたらよいか。

閉じたものの速度を問う——この建築の速度は何か

閉じることによって出ていくもの

- 円形に閉じるものは、静止そのものの内部に速度を含む。回転することで静止するコマと同様に、静止とは速度の一形態である。静止するコマが斜面にさしかかると何が起きるのか。
- 回転運動の速度は、直線運動の速度には解消できない。同じ速度の概念が適用できない。回転運動の内部でこの運動に適合することはどのようなことかを考えよ。